

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.149; Preface

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009427

はじめに

クジラとはクジラ目の海棲哺乳動物の総称であり、約85種が存在している。形態上、ハクジラとヒゲクジラに大別することができるが、大きさの点ではネズミイルカのような1.5メートル程度の小型クジラから地球上で最大の生物であるシロナガスクジラのような体長30メートルを越す大型クジラまで多様である。

人類がクジラを利用し始めたのは考古学的には8000年ぐらい前までさかのぼると推定されている。クジラは人類にとって長きにわたって食料や原材料など重要な資源であり続けてきたが、クジラと人間との関係を大きく変えた出来事のひとつは、1972年にストックホルムで開催された国連の人間環境会議である。アメリカは同会議において「クジラを守れずには、地球環境は守れない」と主張し、大型クジラの捕鯨の停止を主張した。その提案はすぐには商業捕鯨の停止にはつながらなかったものの、10年後の1982年に開催された国際捕鯨委員会 (International Whaling Commission, 略称 IWC) において大型クジラ13種 (当時) の捕獲の一時停止 (モラトリアム) が決定され、それが現在も継続中である。そしてヨーロッパ、中南米、オーストラリアやニュージーランドなどの各国政府や、グリーンピースや国際動物福祉基金 (IFAW) などの国際環境・動物保護 NGO が商業捕鯨の再開に反対し続けており、IWC のもとでの商業捕鯨再開のめどは立っていない。

日本では、江戸時代以降、一部の地域において商業捕鯨を盛んに行うようになった。また、1930年代から1980年代までにかけて、大型鯨類を対象とした商業捕鯨は日本の産業の一角を担ったといえる。しかし、1980年代を境としてその捕鯨産業は、人材的にも技術的にも衰退し、さらに日本人の鯨食離れが加速し、その将来は決して明るいとはいえない。日本政府は2018年12月末に IWC から脱退することを表明し、2019年7月から日本の排他的経済水域において商業捕鯨を再開させることを決定した。世界各地のいくつかの先住民社会や漁村では、大型クジラやイルカを捕獲し、利用している。また、20世紀後半に入ると水族館でのクジラの展示やホエール・ウォッチングなど新たなクジラの利用方法も出現した。

20世紀半ばまでクジラは人類にとって食料資源や産業資源であり、世界各地で捕鯨は行われていたが、1970年代以降、世界の趨勢は、捕鯨推進や容認から鯨類保護や反捕鯨へと変化してきた。このように、人間とクジラの関係はこの半世紀の間に大きく変わってきた。この変化は人間と他の生き物の関係や人間の生き物観の変化の一部を構成しており、世界各地における人間とクジラの関係とその変化や継続の多様な事例は、生き物との関係のあり方を考える上で大変に示唆的で、興味深い研究素材を提供する。

私たちはグローバル化時代における捕鯨の現状と諸課題を理解し、検討するために科

学研究費補助金・基盤研究（A）（海外学術）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克」（課題番号：JP15H02617，研究代表者：岸上伸啓）を2015年4月から2019年3月31日までの4か年間，実施した。岸上伸啓（国立民族学博物館）は，北アメリカ先住民のイヌピアットやイヌイット，ヌーチャヌヒによる捕鯨の現状を比較調査した。浜口尚（園田女子大学短期大学部）はアイスランドの商業捕鯨やベクウェイ島民のザトウクジラ漁を調査し，赤嶺淳（一橋大学）はノルウェーにおける商業捕鯨の歴史と現状について鯨肉の国内外への流通に着目しながら調査を実施した。石川創（下関海洋科学アカデミー）は，ノルウェーと日本の小型沿岸捕鯨の現状について調査を行なった。また，河島基弘（群馬大学）はデンマーク自治領フェロー諸島におけるゴンドウクジラ捕獲と欧米社会における反捕鯨運動に関する調査を行なった。高橋美野梨（北海道大学）と本多俊和（元放送大学）は，グリーンランドにおける捕鯨の歴史と現状について現地調査に従事した。さらに高橋は欧州連合（EU）における捕鯨政策に関する研究を行った。李善愛（宮崎公立大学）は，韓国の鯨食文化と捕鯨政策・反捕鯨運動，ベトナム沿岸地域における鯨信仰の変遷について調査を実施した。私たち8名による調査研究は，世界各地の捕鯨の歴史と現状を網羅するものではないが，これまで国内外でほとんど研究されていなかった地域の代表的な捕鯨について調査を行い，データを収集した点で学術的にきわめて意義深いと考える。

本書は上記の科研プロジェクトの研究成果の一部であり，その目的は世界各地で実施されている代表的な捕鯨の現状と課題を検討し，現在，そして将来におけるクジラと人間との関係について考察することである。捕鯨や人間によるクジラの利用については賛成，反対，中立，そして無関心といったさまざまな立場が存在しているが，本書によってひとりでも多くの方が世界各地の捕鯨の現状と課題について理解を深め，クジラと人間の関係や捕鯨問題について考えるきっかけとなれば，執筆者一同にとって望外の喜びである。また，捕鯨に関する議論をさらに促進するためにも，本書についてさまざまな立場の方々から忌憚の無いご意見やご批判をこう次第である。

岸上伸啓

平成31年3月，東京にて